宮城教育大学附属図書館　児童図書リーフレット

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.13　2009年11月号

■　「北のはし」の少女が教えてくれるラップランドの日常・・・・・・・菅原　敏
■　ぬいぐるみの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博
■　私にとって大切な絵本　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小松　恵子
■　ひっくり返しの意味を考えさせてくれるこの一冊・・・・・・・・・・星山　藍
■　新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博

■　「北のはし」の少女が教えてくれるラップランドの日常

菅原　敏

主人公のマリット・インガは、ラップランドの民「サーメ」（「北のはし」を意味する）の村に生きる少女です。ラップランドの厳しくも美しい大自然と、トナカイとともに生きるサーメの日常が、マリット・インガの目を通して綴られています。

どの絵もとても美しく描かれていることがまず目を引きます。サーメ特有の色彩で飾られた服や日用品が鮮やかに描かれ、壮大な雪原やトナカイの群れとのコントラストが見事です。様々な異文化に接し、サーメの人々とも７ヶ月間暮らしたという、作者ならではの感性が絵に現れているように思われます。その中でも私が一番好きなシーンは、主人公の家族が、果ても知れぬ大雪原の中を、星空の下、そりに乗って移動しているところです。

「ちへいせんの　ちかくで　ほしが　またたいています。たかいそらから　にじいろの　うつくしい　ひかりが　おりてきて、あたしのかおを　なでるように　やさしくゆれました。オーロラです。ふゆのよぞらの　おくりものです。ゆきが　ばらいろにかがやきました。」

あたたかいふとんにくるまって、そりに揺られながら見るオーロラの風景が、この子の日常なのだと考えると、単に羨ましいということ以上に、様々なことを考えさせられます。

生活の風景では、サーメの人々の営みが、如何にトナカイと密接に関わっているかを丁寧に描写しています。

「きょう　とうさんが　トナカイを一とう　つぶしました。にくは　もちろん　かわも　ないぞうも　だいじです。すてるところなんか　ありません。」

「かあさんは　子どもトナカイの耳に、ナイフで　あたしのしるしを　つけてくれました。あたしは　まだ五さいですが、たんじょうびのたびに　トナカイをもらうので、としのかずだけトナカイをもっています。」

大人の私たちも含め、いまや私たちは、家畜を食用にと畜する現場を目にすることはありません。マリット・インガは、幼いころから自分のトナカイを持ち、大切に育て、しかしそれが単にかわいいペットではないことを知っていくのでしょう。そのすねの皮から自分の靴がつくられ、毛皮からズボンがつくられていくのです。肉はおいしいシチューとなり、脳みそもパンケーキになるのです。自分の命がトナカイによって支えられていることを知っているのでしょう。

都会に生まれ育った子どもたちにこそ、ぜひ読んでもらいたい本です。こんな暮らしがあるんだと、きっと親子で驚きながら楽しむことができると思います。

※「ゆきとトナカイのうた」ボディル・ハグブリンク作・絵／山内清子訳／ポプラ社

（理科教育講座）

■　ぬいぐるみの・・・

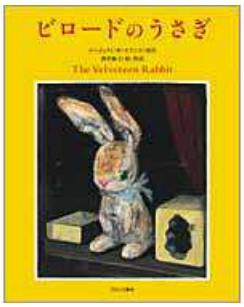
藤田　　博

ぬいぐるみには決まって縫い目があります。どれほどほんものらしくつくられていても、ほんものではない、ほんものに似せた「似せもの」であるのがわかるその縫い目は、うそとほんとの境目を示しています。うそのぬいぐるみが、ほんとになることがあるとしたらとの問い掛けは、話さないぬいぐるみが話し出す、動かないぬいぐるみが動き出すとしたらを問うことと一つです。話すのは持ち主が問い掛け、自ら答えるから、動くのは持ち主が動かしてやるから、そうしたことを承知の上で、なおかつそれを問い掛けなければならないのです。

Ａ.Ａ.ミルン『くまのプーさん』では、プーはもちろんのこと、コブタもイーヨーもカンガもルーもトラーもぬいぐるみ、ウサギとフクロ、そして言うまでもなくクリストファー・ロビンを除いてぬいぐるみです。ぬいぐるみであるために「脳みそ」を持たないプーは、頭が悪い。あたり前のそのことにプーは言及します。「ばっかなクマのやつ！」「ぼくは、とっても頭のわるいクマなんだ。」プーはいくつもの失敗を仕出かします。これを「失敗物語」と呼んでもいいほどです。しかし、プーは本当に頭が悪いのでしょうか。プーはいくつもの「発明」をし、いくつもの「発見」をします。頭が悪いとされるのは、そうしたものが常識を超えてしまっているからなのです。

読者はプーがぬいぐるみであることを忘れています。ぬいぐるみであるのを思い出すとすれば、クリストファー・ロビンが仲間の一人となっているのを意識する時です。そのロビンは、ぬいぐるみであるのを忘れさせることにもつながっています。プーはロビンのぬいぐるみ、ぬいぐるみの持ち主ロビンその人が、プーがぬいぐるみであるのを忘れているからです。そのためにこそ、ロビンは森に一緒に住むことができるのです。

ミヒャエル・エンデ『カスペルとぼうや』のぬいぐるみは、色々な模様の布でできた道化のカスペルです。カスペルはぼうやのお気に入りでした。ところが、おもちゃ屋のウィンドーをのぞき、一人で歩くロボットや口をきく人形を見たぼうやは、カスペルがつまらなくなり、窓から放り出してしまいます。イヌにくわえ上げられたカスペルは、かまれたり、ふり回されたり。すっかりきたなくなってしまったカスペルは、イヌの飼い主にぼろきれ扱いされ、ごみ入れに捨てられてしまうのです。くずやがそれを拾います。くずやの車の一番上にぼろの人形を見つけたのは、ぼうやのおばあさんでした。おばあさんには、ぼうやのカスペルであるのがすぐわかったのです。おばあさんは箱の中の箱の中の箱と七重もの入れ子にしたカスペルを送ります。そうしたのは、ほんものとは何かをぼうやに教えるためだったのではないでしょうか。



マージェリィ・Ｗ・ビアンコ『ビロードのうさぎ』にあって、ぼうやのお気に入りはうさぎのぬいぐるみです。ぼうやが新しいプレゼントに夢中になったために、子ども部屋の棚の中で暮らすようになってしまいます。お手伝いのナナが、イヌのおもちゃが見当たらないことから代わりにうさぎをあてがいます。ぼうやとまた一緒に過ごすようになったうさぎは、ぼうやにかわいがられ、よごれてきたなくなりました。「どこがいいんだろ、こんなきたない　おもちゃの」と言うナナに、ぼうやは答えます、「この子は　おもちゃじゃないの、ほんとうの　うさぎなの」と。よごれていればよごれているほど価値がある、それが「子どもへやのまほう」なのです。

ぼうやが病気になりました。病気が治った後、「こりゃあバイキンのかたまりだよ。すぐにでも　やいてしまいなさい。」と医者が言います。うさぎの頬を伝い、ほんとうの涙が地面に落ちます。にせもののぬいぐるみからほんものの涙が落ちたのです。そこに現れた妖精によって、うさぎはほんもののうさぎになることができました。ある時、ぼうやは、森の中でじっとこちらを見つめているうさぎと出会います。うさぎがその目で語ろうとしたのは何だったのでしょうか。ぬいぐるみのままでいたかったとの思いでしょうか。にせものはどこまでも似せたもの、ほんものになることのない「似せもの」です。それがほんものになるとはどういうことなのかを、うさぎは教えてくれているのです。

（英語教育講座）

※「くまのプーさん」Ａ.Ａ.ミルン・作／石井桃子・訳／岩波少年文庫

※「カスペルとぼうや」ミヒャエル・エンデ・文／ロスビータ・クォードフリーク・絵／ほるぷ出版

※「ビロードのうさぎ」マージェリィ・Ｗ・ビアンコ・原作／酒井駒子・絵・抄訳／ブロンズ新社

■　私にとって大切な絵本

小松　惠子

私にとって特に大切な絵本が２冊あります。

１冊目は、幼い頃読んでもらい、今でも心の奥底にある、中川季枝子・作／大村百合子・絵『そらいろのたね』（福音館書店）です。

主人公のゆうじくんが楽しそうに飛行機で遊んでいると、きつねがやってきて、そらいろのたねと取り替えてほしいと交渉します。ゆうじくんは、きつねとの交渉に応じ、そらいろのたねを家の庭に植え、大切に育てます。

すると、そらいろのたねからは家が成り、日に日に大きくなり出したのです。ゆうじくんは、ともだちや森の動物たちをそらいろのたねの家に招き、楽しく遊ぶことができました。そこへ、きつねがやってきて、飛行機は返すからそらいらのたねの家も返してほしいと言いました。そして、家の中で遊んでいた多くの仲間を外に追い出し、すべての窓を閉めてしまいます。すると、生長を続けている家は、ますます大きく膨れあがり、ついには爆発し壊れてしまったのです。目をまわしたきつねが、倒れている場面で終わりとなります。

私の心の中にいつまでも残っている理由は、相反する生き方が描かれているからだと思います。どんなことも前向きに受け止め、努力を惜しまず対応するゆうじくんの姿と、どんな時も自分中心に行動するきつねの姿です。気ままなきつねに振り回されているように見えるゆうじくんですが、結果的には常に幸福感を持って生きているのです。気ままなきつねは、幸せそうに見えて実は心を満たす術を知らないのです。

２冊目は、子育てをしながら出会った、谷川俊太郎・作／和田誠・絵『あな』（福音館書店）です。

主人公のひろしくんがシャベルで庭にあなを掘る話です。もくもくと掘る姿を家族やともだちが見て、簡単な言葉をかけるだけの絵本です。絵本いっぱいに地面の中の様子を描くことで、掘っている様子が分かりやすく、おもしろいものになっています。ページをめくる毎に少しずつあなは深くなります。いもむしがやってくる場面もあります。視覚的にも魅力的なのですが、私が惹かれた理由は、最後のページでした。ひろしくんは深く掘ったあなの中に座り、あなの壁のシャベルの跡にさわってみたり、土の匂いを嗅いでみたりします。そして、最後に空を見上げるのです。あなから出た後、最後のページをめくると始めのページと同じになっています。あなを埋め、もとに戻した状態になっているのです。

大人になって出会った衝撃的な絵本でした。人生そのものを表しているようだと感じたのです。掘る前と掘った（埋め直した）後、何も変わっていないのはなぜなのかという疑問に見事に答えを出してくれたのです。シャベルの跡をさわってみて感じたこと、土のいい匂い、見上げた空の青さ、そしてやり遂げた充実感、すべてが生きる姿だと思います。なぜ、死んでいくのがわかっていて生きるのか。この絵本から、生きるとは、生きる過程を生きることなのだと改めて教えられたのです。それからは、今まで以上に、結果ではなく、過程を大切に生きようと考えました。

学校教育でこの２冊を利用しています。

『そらいろのたね』は、家庭科教育において、保育学習でこころの発達を題材としている時です。こころは、ことばと社会性と情緒の発達で豊かになることを教えるのですが、情緒を感情的に体験させる目的で読んで聞かせます。読み終わった時の、何とも言えない間を大切にしています。『あな』は、特に３年生の進路学習の時、どう生きることが大切なのか、高校受験をどう理解し、乗り越えるのかなどを考えさせる場面で利用しています。これからも、多くの絵本に触れ、多くのことを教えてもらおうと思います。

※「そらいろのたね」中川季枝子・作／大村百合子・絵／福音館書店
※「あな」谷川俊太郎・作／和田誠・絵／福音館書店

（附属中学校教諭）

■　ひっくり返しの意味を考えさせてくれるこの一冊

トミー・アンゲラー・作／今江祥智・訳『すてきな三にんぐみ』（偕成社）

星山　　藍

黒いマントに黒い帽子、帽子の下からはギロリと覗く鋭い目。手にはギラリと赤く光る大まさかり。「この　さんにんぐみに　であったら、ごふじんは　きを　うしない、しっかりものでも　きもを　つぶし、いぬなんか　いちもくさん……。」

「こわい」三人組は、金持ちを狙っては宝を取り上げ、隠れ家にため込んでいました。ある日、三人組がいつものように馬車を襲うと、中には宝物ではなく、孤児の女の子ティファニーちゃんが。連れて帰ると、宝の山を見たティファニーちゃんが、「まぁあ、これ　どうするの？」これまではどうするつもりもなかった三人・・・これから「どうするの？」

三人組の三角にティファニーちゃんが加わることで、四角になりました。一つ二つと増えていくその角は、やがて鋭い角が和らいで、誰をも包み込む滑らかな円へと形を変えるのです。三人だけでは気付くことのなかった発見です。人生は時に 180 度方向を変えることがあります。「こわーいどろぼうさま」三人組は「すてきな」ことを始めたのです。

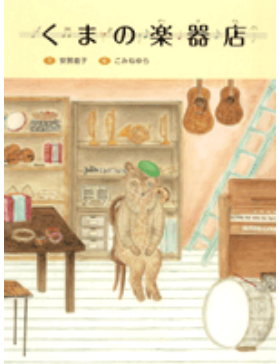
読み終わった後、「こわい」三人組が急に変わった印象を受けますが、「人が好き」な優しい心は三人組の中に元々あったものなのではないでしょうか。決して誰も傷つけず、盗んだ宝にもまったく手を付けていなかったのですから。馬車を襲ったのは、人と関わりたい気持ちの表れだったとも考えられるのです。こんな三人組をあなたも「すてきな」三人組と思ってしまうはずです。

（国際文化専攻４年）

■　新刊紹介

安房直子・作／こみねゆら・絵『くまの楽器店』（小学館）

「ふしぎや」は野原の真ん中、大きなニレの木の下にあります。緑のベレー帽をかぶったくまが店主です。最初にやって来たのは、雨でびしょぬれになった男の子。くまは、「くるのを待ってましたよ」と声をかけます。梅の実三つを差し出し、男の子はトランペットを買い求めます。トランペットを吹きながら野原の一本道を歩いていくと、雲が動き、晴れ間がのぞき始めるのです。



ぶどう園のおじさんが、月明かりに照らされた野原の一本道をやって来ます。ぶどうが甘くならないのが心配なのです。「ぶどうはね、音楽がたりないと、すっぱくなるんですよ」、そう言ってくまはハーモニカを差し出します。すっぱいぶどうが甘くなるハーモニカです。甘くなったぶどうを持っておじさんがお礼にやって来ます。

レストランと間違えてやって来たのは、腹をすかせたねずみです。「そんなもの、いらないわ」、くまが差し出すカスタネットにねずみが怒ります。「くりか、くるみか、どんぐりか、それとも、いちじく、ほういほい」、そう言ってくまがカスタネットを叩くと、くるみの実が落ちてきます。ねずみはそのカスタネットを５０円で買い求めます。

セーターの上にオーバー、手ぶくろにえりまきをして、「あったかくなるいい方法」を探しに来たうさぎへのお奨めは太鼓です。「五百円にしときましょう。」太鼓を叩くと、「顔にあったかい風が、ふうっとかかって」、「春の野原で、でんぐり返しを十も二十もしたみたい」な気持ちになってきたのです。

梅の実三つのトランペット、５０円のカスタネット、すべてが売値とものの価値とが不釣合いの不等価交換、それが行われるのが「ふしぎや」です。野原の真ん中にある「ふしぎや」へと通じる一本道は、「ふしぎや」につながると同時に、不思議な楽器がつくり出す不思議な世界へとつながっていたのです。おじさんからねずみ、うさぎへと、冬がそこまでやって来ているのがわかります。「ふしぎや」にやって来たお客さんのあたたかくなる心は、冬眠へと向かうくまの心、長い冬の向こうの春を待つくまの思いが、「ふしぎや」の不思議をつくり出しているのかもしれません。

（藤田　　博）

発行：宮城教育大学附属図書館